三重県委託事業　人権保育専門講座８（連続講座③）

『保育現場における イスラム教との共生にむけて』

常磐会短期大学 教授　卜田（しめだ）　真一郎（しんいちろう） さん
ゲストスピーカー　オンバダ　香織（かおり） さん

人権保育専門講座８では、今年度も専門性を高める研修として、連続講座を開催しました。第３回は12月16日にオンバダ香織さんをゲストにお招きし、イスラム教を信仰する保護者の立場からお話をしていただきました。

オンバダさんは、アフリカに関連する活動をきっかけに、スーダン人の夫と出会い、国際結婚をしてイスラム教に改宗されました。現在は、夫と小学校２年生の子どもの３人で日本に住んでいます。

イスラム教のこと

イスラム教とは、「アッラーが唯一の創造主であり、ムハンマドがアッラーによって遣わされた預言者である」という信仰をもつ人々の信じる宗教です。コーラン（聖書）には、様々な事柄について、ムスリムとしての「義務」「推奨されること」「許可」「避けたほうがよいこと」「禁止」について書かれています。

《例えば…》

- 豚肉を食べることを禁止
- 女性は夫の前以外での肌の露出を禁止
- 一日に５回、メッカの方を向いて礼拝（サラー）を行う
- 年に１回、約１カ月の断食月（ラマダン）があり、日の出前から日没までは飲食しない　など

宗教については、家庭によって信仰の程度に「グラデーション」があります。何が良くて何がだめかは、家庭によって様々です。保育者がムスリム保護者それぞれと話をし、そのすり合わせができれば、保護者は安心して保育を任せることができると思います。外国人の子どもにとって、自分の国の文化、宗教、生活習慣など、自分のことをよく理解してくれるおとな（保育者など）と、どれだけ出会えるかがとても重要です。

子育てを通して感じたこと

イスラム教では、クリスマスはありません。息子には、「家にはサンタさんは来ない」と教えてきました。しかし、保護者主催のクリスマス会に、私も夫も一緒に参加したことがあります。また、豚肉は食べられないので、豚肉を使った食品を避けた給食を園で提供してもらったり、弁当を持参したりしました。他の子どもからは、「なぜ弁当なのか」と聞かれ、息子は「豚肉を食べないから」と話をしていたようです。４、５歳になると、周りから肌の色のことでからかわれたり、外国人と言われたりしました。息子にとっては初めての体験です。私は担任に相談し、周りの子どもたちに、「肌の色」のことについて話をしてもらいました。その後は、理解をする子どもたちも増えて、息子は落ち着いていきました。

すべての園・学校で、お互いを知り合うことで、「ありのままの自分でいい」と思える仲間づくりの取組をしていってほしいと思います。また、外国籍の家庭のなかには、同じ国の方とコミュニティをつくっている家庭もありますが、なかには孤立してしまっている家庭もあります。そのような場合には、園としてフォローしていくことが必要だと思います。

【参加者アンケートより】

- オンバダさんの話を聞いて、今までイスラム教のことを誤解していた自分に気づきました。「知らないこと」「関心をもたないこと」は、偏見や差別につながると、あらためて感じます。自分をふり返る機会になりました。
- 「ちがい」を認め合えないことで、それが差別につながり、人を傷つけてしまうこともあると思います。子どもたちが生活している保育園という小さい社会のなかで、お互いの「ちがい」に気づいたときに、その「ちがい」をプラスの出会いにしていける保育者でありたいと思いました。